統一團報

第八十七號

明治三十五年七月十五日發行

目次

一宗教の利益……本立院日響稿
一一大事(接前)……妙光道人敎敎
一本門の本尊(續)……本成院說敎
一常唱院日經上人(接前)……野口義禪
一開宗六百五十年紀念會祝詞……柿沼秀子
一作西行風雜……松尾忍水

統一彙報

一至誠隨行日誌……高木松太郎
一岡山通信……中川事顯稿
一聖祖門下の統一運動……
一宗徒大會決議實行期成同盟會……
一東京佛教會の無主義無定見……山田春次郎稿
一大會顛末詳の報告……
一感謝狀……
一千葉縣の開宗紀念法要……
團友消息
▲松尾忍水君　▲清瀨貞雄君　▲石渡日穀君
▲山本通雄君　▲荒川智會君

廣告數件

廣告

主筆　田中智學居士

妙宗

毎月一回(六日)
毎號大附錄附發行
所相模鎌倉要山師
子王文庫
定價一部金十錢
(附錄共)郵稅金一
錢壹ヶ年前金壹圓
貳拾錢(不要郵稅)

送金は師子王文庫宛鎌倉局振込の事
四月六日「第五編」第六號」既刊

主筆　加藤文雅

日宗新報

毎月三回(八の日)
發行、發行所武藏
池上日宗新報社
定價一部金五錢、
十八冊(半年分)
八十五錢、卅六冊
(壹年分)壹圓六十
五錢、一切前金の事、送金は池上郵便受取所
へ振込み「日宗新報主任加藤文雅」と御指定の
事、六月八日『創立第八百十五輯』『革新第二百
三十六輯』既刊

稟告

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊五錢十二冊前金五十七錢廿四冊前
金一圓八錢郵券代用は一割增但五厘切手に限
一講讀申込の節は住所姓名を楷書にて認むべし
一爲替は武藏國品川郵便局へ向け御振り込の事
一本團は別に領收書を發せず但し領收證を要す
る向は返信料を封入するか或は爲替振込の節
拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五號活字廿四字詰每一行金七錢なり

明治卅五年六月十五日印刷發行

發行人　井村恂也
編輯人　山根顯道
印刷人　鈴木暲學

東京府荏原郡品川町元南品川四百十二番地
發行所　統一團團報部

第二回專門夏期講習會開設豫告

◎本會微力自から圖らず幸ひに各教團有志の協賛を得て昨夏始めて第一回夏期講習會を相摸灣頭波靜かなる寂光山の靈地に開けり家華一巡又た將に伊豆伊東の靈地に開設せられんとす冀くは　聖祖門下の志士來り會せよ

○會場　伊豆伊東佛現寺
○會期　七月廿五日より八月二日迄十日間
○會費　一日實費三十五錢
○講師　守本文靜師、本多日生師　本間海解師、脇田堯惇師、田中智學居士　講題未定）
○科外　「台延餘霞」講師清水龍山師
○申込　七月中旬迄に左記へ

地は是れ本化上首法華經色讀の聖跡澤波勝巒自ら是れ本地の風光を示し一旬の虛空會現前せん眞日蓮主義を知らんとするもの自ら進んで眞日蓮主義を發揚せんとするものは老幼男女を問はず大に來り會せよ

發起　東京市谷中日暮里本行寺內　橘香會
贊助　東京府下在原郡品川町　統一團團報部

第二回夏期講習會開催に就て

盡んで全國の聖祖門下特志眞俗諸士に請ひ奉つらんと欲する處のものあり开は他事ならず昨夏相摸龍口にて開きし講習會は聖門の學生組たる橘香會の手に經營せられ幸に多大の妙果を收めて門下各教團の尠からぬ同情を博せりしが本年も亦昨夏講習會場の決議により橘香會の發起として第二回の會合を見るべく目下奔走經營中に有之諸般の準備は事ゆへなく周足すべからんも唯憂ふる處は金錢に餘容なき學生の悲しさ昨年の如きも既に收支決算上尠からぬ不足を生じ無止同盟雜誌に於て特に應分の義助をなし漸く其首尾を全ふせし爲躬仍て本年の開催に就ては一人も多く參會あらん事を希ふと共に　聖業展進の資助として多少に拘はらず義捐を切望仕度尤も同盟雜誌社の內何れへなりとも御都合上御申出被成下度此段特に謹告候也

鎌倉妻山
武藏池上
仝　品川

師子王文庫
日蓮宗新報社
統一團々報部

團告

團員諸君の起居動靜を聞かまはしく「團友消息」の一欄を開く品川妙蓮寺編輯部宛葉書にて御通信を希ふ

編輯員敬白

統一團報第八拾七號　（明治三十五年七月十五日發行）

●宗教の利益

本立院日誓稿

宗教とは神聖なる本尊を顯示し、之に信念を捧げ安心立命を敎ふるものであるから、必ず利益あると云ふ事は理の當然である、乍去通俗の人間は或は無宗敎に流れ或は迷信に失する事が多ひ、實に慨歎すべき事である、無宗敎者は多少智識あるものに多く、迷信者は無敎育のものに數多くある、而して互に其愚を笑ふて居る、併し予を以て之を見れば、五十步百步であつて互に邪見に陷りて居ることは免れないと思ふ

無宗敎者が宗敎を信する必要を感じないのは、高妙なる理想の足りないのと、迷信者の行爲に嘔吐を催すとにあるけれども、又宗敎家が直接卑近なる處世術としての利益あることを說明しないからであらうと思ふ、依て予は常識方面から其蒙を啓て見よう

如何なる人でも損得と云ふ觀念はある、所謂利害得失を打算するは生命あるものゝ通有性と云てよろしい、开處で宗敎は損得を度外視するものであると云ふ觀察は、先天的に免れない、これが抑も誤認の根原である經文を拜見すれば佛陀の敎席に侍りし聽衆は、心大歡喜とか踊躍歡喜とか云て皆滿足を表して居る、損をして歡ぶものは決してあるべき筈がない、さればこう得大德益とも書てある

諸君試みに本尊に對して信念を捧げつゝありし心情を一考して見給へ、必ず邪惡の念が何時の間にか一掃せ

られて、正善なる心地に住することを記憶するであらう、これが何人も否認する事の出來ない利益である、如何なる惡人でも罪惡を工夫する爲に信心するものはない、必ずや過去の罪障を懺悔する念が勃如として湧出するに相違ない、本尊は極めて神聖なる威嚴、圓滿なる慈悲、廣大なる智惠、普遍なる光明の活現でましますものであるから、明闇並び存せざる理と同じく、本尊の御前に拜跪の時凡ての惡徳は倏忽消滅するのである、若も罪惡の念慮が失せないとすれば、自然本尊に向て信念を捧げる事が出來なくなるのである、感應道交の理窟が證明するのである、予は更に生物學の順應論によりて平易なる明解を與へて見ようと思ふ、彼の青き草木にとまつて居る蟲の多く青色なのは、矢張順應其宜きを得て居るのである、若も青色でなければ危度他の强者の爲に生命を失ふのである、柳の木に棲む蟬は柳の皮に類似して居る、朱に交れば赤くなると云ふのも、麻の中のよもぎの如しと云ふのも、皆同一の理である、善良なる主家に奉公する身は、自然善良なる精神に化せらるゝので、善良にならねばどうして勤まるものでない、之に反し邪惡なる主人に奉公すれば、何日となく罪惡の念が起る事になる、これが則ち人畜を問はず其境遇に同化すると云ふものだ、されば御本尊に向ひ信念を捧げんとすれば、期せずして御本尊に同化されるのである、換言すれば一切の邪念が排除せられて、純良なる精神が發揮せらるゝので、是則ち順應利益と申すべきものである、普通利益と稱すべきもの多々あるも、惡を去り善を生ずると云ふ事が利益の根本であつて、其他は枝葉であると思ふ、然らば則ち常識方面から考へても、宗教の利益あることは明白である

信者の弊原を說明する事としよう

迷信者が宗教に對する利益とは如何と云ふに、決して眞正の利益其ものは知らないで、唯自已の利欲に滿足を與へるもの、語を換へて之を云へば其正道を蹈まずして僥倖を得るもの、うれが則ち利益かの如く思ふて居る、例せば勤勉を積まずして財産を得んとし、養生を專らにせずして健康を欲し、不正の事業を企てゝ成効を遂げんとし、德義を重んぜずして名譽を博せんとするが如き、原因結果の理法を無視して、而も自已の非望が意の如く達せらるゝものと思ふて居る、更に其甚しきに至りては、正道を蹈んで利益を得るのはそれは當然であるが、其正道を蹈まずして而も不思議に其効を奏するのが、うれが宗教の利益である开處が難有のである、若しうでなければ宗教の必要を認めぬと放言するものがある、是れ則ち淫祠邪教の勢力を逞ふする所以である、されど此等は全く膺造紙幣を以て物品を購求せんとするに均しく、曾に其目的を達せざるのみならず、却て災害を蒙ることは必然である

地獄禍等が信ずる眞正の宗教は、非論理なる僥倖を排斥するのみならず、進んで或主樣者の存在の下に賞罰ありと云ふ事をも許容せぬのである、則ち自業自得、因果應報を原則とするものなるを以て、偶々賞罰の語を用ふる事あるも唯是れ一時の假名にして、因果規律の變名に過ぎないのである、迷信論者は何よりも先づ常識方面に留意すべきであらうと思ふ、予は更に高妙なる宗教的利益を說明する事にしよう

由來宗教とは、無限絕待の境界よりして有限相待の境界に光被し、相待界の吾人をして絕待界の佛陀に接せ

しむるのである、經に如我等無異と說けるもの、全く此殼の消息をもらしたものである、佛陀の境界ば哲學者の所謂眞、善、美の總合躰にして而も活力あるものである、常住、快樂、自在、淸淨等の完備したものである、智惠、慈悲、忍耐、强健、勇猛、光明等の活現である、事、智、悲三身即一の無作の應身である、斯の如き佛陀の境界と同化するのが宗敎の利益である、凡身を滅して佛身となるのは、うれは有爲の報佛夢中の權果で、決して眞佛でない、先輩の言に造の一字は基敎を滅し成の一字佛敎を亡ぼすと云はれたが、實に明言である、無より有を生ずる的成佛は全く虛妄である、今茲に權兵衛と命くる人ありと假定せんに、此人極めて貧窮にして生活に困し、非常の勞働によりて僅かに其日々々を送りつゝある、然るに此人の親類に太良兵衛と云ふものが有て、昔より權兵衛の自宅の事に精通して居る、开處で一日太郎兵衛が權兵衛に向て、貴君の家の床の下に黃金を入れた壺が埋てあるから其を堀出し給へ、貴君は非常の財產家であると云た、權兵衛成程と信じて其敎の如く堀りしに、果して黃金を得無限の有福者と成たのである、此權兵衛貧と思ひし時も富となりし時も財產に決して增減はない、けれども其活用に於ては天地の差がある、又世の中の信用も雲泥の別が生じて來た、是が經に無上寶聚不求自得と云ふことである、吾人は權兵衛の如く、佛陀は太良兵衛の如く、一念三千の法躰は財產の如く、如來の說法は太良兵衛の注意の如く、吾人の修行は黃金を堀るが如く、始成正覺は黃金發見の如く、久遠本覺は祖先傳來の如く、始覺即本覺始本不二は、今日の發見即本來の長者なるが如く、此理を示すが即ち妙法蓮華經である、得大法利とは宗敎の高妙なる大利益である

一大事（第八十三號のつゝき）

妙光道人說敎

世の人々が信仰其物の効果に就て、之を如何樣に考察て居るかと云ふに、其信仰の効果を單に未來世の一方に期して、社會上人生上に偉大の効果あることを認識して居らぬ、果して信仰其物の効果が只未來世の一方に止まるものであるならば、信仰は人世上其必要を認ひるに苦しむことである、決して斯る道理のものでなからうと思ふ、何せなれば信仰其物の內包に於て、社會人衆に効驗を與へるだけの性分を具有して居るのだ、信仰其物の內包に於て社會人生に効驗を與ふるだけの性分なきものであるならば、うれこそ信仰なるものは人世上何の必要なきものとなるではないか、

然らば何故に信仰の內包に斯る偉大の効驗を與へる性分を具へて居るかと云ふに、こゝが聞き所である……之を御咄しするには、先づ信仰の意義に就て述べねばならぬ、信仰とは信は信順の義仰は仰慕の義にして信順仰慕の思想を指すものである、其信順仰慕の思想を喚起するには、必ずや是れが所對がなければならん道理である、何物に信順するか何物を迎慕するか、其憑據がなくして信順の心の起る道理なく、所對なくして迎慕の思想が生ずる筈はなからう、假令ば手を火に觸れば必ず手があついが如く、又手を水に投ずれば必

ず手がつめたいと一般で、火に觸れざればあついとも思はねば、水に投せざれば冷めたいとも思はぬが如く、信仰も其對象がなかつたならば決して起るべき筈がないことは明白である。火に觸れてあついのは、火其物にあつい性分が具有つて居るからである、水に投じてつめたいのは、水其物につめたい性分が具有つて居るからうれが手に薫染して此く感せらるゝのだ、信仰も亦た斯の如く、其信仰の憑據となるべき境的其物の性分が發して信仰の内容となつて、うれが行動に顯れて社界人生に効驗を與へるのである、してみると信仰其物の効果は即ち其所對の性分の如何に依つて、人世の上に偉大の効驗を顯はすと否との相違を來すのである、然らば如何なる對象に憑つて起るところの信仰が、果して社會人生に偉大の功利を與ふることができるだらうか、

抑も釋迦牟尼佛一代五拾年の所說の諸經之を一切經と名く、此一切佛敎を大別すれば權實の二敎となるので釋迦牟尼佛成道の初めより四十餘年の間衆生の根性欲に應じ　一時善巧方便の爲めに施設せられし所の諸經之を爾前權敎と云ひ、四十餘年の後眞實已證の本懷を說かれしもの之を法華實敎と云ふことは　今更ら辯を要せぬことである、方便權假の敎を信順して起せる信仰は、其對象の敎が權假であるから、是れより起る所の信仰は其內容に於て圓滿を欠げるが故に、之を人生に及ぼすに偉大の功利を與ふることができぬ　法華經の信仰は其對象たる敎義其物が眞實圓滿なるが故に、之を社界人生に及ぼせば社界を感化し人生を救濟し、實に偉大の功驗を顯はすに至るのである。

何故に法華經の信仰が社界を感化し人世を救濟することができるかと云ふに、法華經うのもの、內包に於て其活潑の性分を具有して居るからである、今法華經の內容を說くことは略しまして述ぶることは略しまして

顯著なるものを擧げて云へば二十の大事と云ふことがある、其中にも二乘作佛提婆龍女の成佛壽量の顯本等は其骨目である、其二乘作佛とは爾前四拾餘年には二乘を排斥せること言語に盡くせぬ、然るに法華に至りて其二乘に對し授記作佛を許し玉ふたので、これ法華の圓理が一代に超絕せる所以を事實に證明されたのである、又提婆龍女の成佛とは惡人女人は爾前四拾餘年に於て蛇蝎の如くに厭嫌れしものが、法華經に來り成佛得道を示され、以て法華經の功利の他經に勝るゝことを顯されたのである、又壽量の顯本とは爾前四拾餘年の諸經には未だ佛陀の顯本を示されない、然るに法華經壽量品に來りて顯本して一大本佛を顯示し、以て各修各行の諸佛を統攝し、諸佛の大智は本佛釋尊の大々妙智より分流し、諸佛の大慈悲は本佛釋尊の大々慈悲に統攝せらるゝことが明になりました、此の外法華經の經功を擧げ來れば澤山ある、此には略して置く、さて斯の如く法華經の內容は諸經に超絕して優勝なるが故に、吾々法華經に信順すれば法華經の內包に於て二乘作佛の妙旨が含有して居るから、其信仰の思想が行爲の外形に顯れて、方今の如き自利的社界に立つても其風潮に染まらず、層一層に奮勵して他を救濟する勞を取るに至るようになる、又法華經の內包に於て諸經に排斥せる女人成佛を示せるが故に、婦人の此經に隨喜して信念を起すときは其信念開發して、嫉妬深きものも隨喜の心を起し、愛著の心も爲めに變じて能捨の心を起すに至る、愚痴多きものも智惠を研くに至る、又法華經の內包に於て提婆の成佛を示されてあるから、無順の惡人も此經に信順すれば其信仰の反應として、十惡の如き罪惡を造りしものも轉じて慈善の人となるに至る、又法華經壽量品には本佛周遍の大慈

悲を說かれたるが敎に、此大慈悲を感じ隨喜して起りたる信仰が頓て開發して行爲に顯れますれば、慈善心の欠乏せるものも慈心を起すに至り、懈怠のものは精進奮勵の心を起し、退心あるものは勇猛の心を起し、不知不識社界に立つて奮勵活動の人たるに至るので、斯の如く法華經の信仰は精神に反應してやがて行爲の外形に薰染し、社界上に偉大の効驗を結ぶに至るのが、此法華經信仰の價値である點である、故に無量義經の十功德品に十種の功德を說かれし其第一の功德の下に、此意味を說かれてあります、

第一に是經は、能く菩薩の未だ發心せざる者をして菩提の心を發さしめ、慈仁なき者には慈心を起さしめ殺戮を好む者には大慈の心を起さしめ、嫉妬を生ずる者には隨喜の心を起さしめ、愛着ある者には能捨の心を起さしめ、諸の慳貪の者には布施の心を起さしめ、憍慢多き者には持戒の心を起さしめ、瞋恚盛なる者には忍辱の心を起さしめ、懈怠を生ずる者には精進の心を起さしめ、諸の散乱の者には禪定の心を起さしめ、愚痴多き者には智惠の心を起さしめ、未だ彼を度する能はざる者には彼を度する心を起さしめ、十惡を行する者には十善の心を起さしめ、有爲を樂ふ者には無爲の心を起さしめ、退心ある者には不退の心を起さしめ、有漏を爲す者には無漏の心を起さしめ、煩惱多き者には除滅の心を起さしむ、善男子是を此經の第一の功德不思議の力と名く

元來二乘作佛提婆龍女の成佛壽量の顯本等、此他法華經の經功は凡べて妙法蓮華經の功德を開發して事實に顯はしたるものであるから　是等は一箇の妙法蓮華經の內容である、故に此妙法の內容が行爲に顯れてくると、此無量義經の十功德品の經文の通りに、一言の妙法信仰により、惡る者美の人となることができる、

に偉大の効驗を顯はすことができないのだ、故に日蓮聖祖教訓を垂れて曰く

受けがたき人身をうけ値がたき佛法にあひて爭か虛しくては過べきぞ、同く信を取るならば又大小權實のある中に、諸佛出世の本意衆生成佛の直道の一乘をこそ信受すべけれ、持つ處の御經の諸經に勝れてまします故に　能持つ人又諸人にまされり、爰を以て經に云能持是經者於衆生中亦爲第一と說き給へり云云

今の世の人々の中に、信仰の効果を唯だ未來世の一方に求むるを是れ專らとし、信仰の功果を社界人生上に求むるものを以て異端の如く卑しむに至つては、殆ど沙汰の限りである、又信仰の効果を社界上人生上に必要を認むるものも、たゞ病氣に罹りしとき其病苦を除かんとて其信仰の効果を感ずるもの、若しくは災難に遇ふて途方にくれる場合に臨み信仰に依り之れが救濟を仰がんとするが如き有樣である、是等は皆信仰其物が社界上人生上の一大事たることを認識していないのであらうと思ふ、信仰は一般人生の德性を養ふ上に於て必要缺くべからざるものであるから、信仰は一般の人々に通じ社界凡ての方面に通じて、一日片時も放任して置くべき問題でなからう、依て吾々の一大事は之れに超すものはなからうと認めたから、爰に一大事と揭げて聊か御咄しを致した次第であります

（をわり）

◉本門の本尊

（第八十四號の續）

本成院說教

うれから、次か僧寶でありますが、これは佛樣がお說きに相成りましたる所の、御敎を後の世の衆生に傳へ之を信仰させて下さる御方々と、而して其信仰をする者を守護して下さるゝ人々を云ふのであります、御本尊の中では、上行菩薩より已下凡ての菩薩諸天善神を申すのであります、此中でも皆同樣ではない　上行等の菩薩樣達は本化の菩薩と申して、釋尊の第一番の御弟子で、末代の吾々の爲めには殊に大切御方であります、何故かと云ふに、御釋迦樣が壽量品をお說きに相成りまして、南無妙法蓮華經の大良藥を御顯說遊ばされまた、而して此大良藥を末代の吾々の爲めに、お遺しに相成る時に、其御使をは藥王觀音等の迹化の菩薩達かれ羅遊ばされましたけれども、「止ね善男子」と釋尊が信許がありませんで、而して本化の菩薩たる上行等の六萬恒河沙と云ふ澤山の菩薩樣をお召出に成りまして、末法の時に弘通する樣御付屬に相成ました、此事を宗祖が「今の遣使通告は地涌也」と申されたのであります、うれであるから末法の我々は本化地涌の菩薩樣に助けて頂くのであるから、此菩薩は取分けて大切にせねばならぬのであります、先より申遊ばしたる本法の御題目と本佛の釋尊と本化の菩薩と此三つは、本門の本尊の中の最も肝要であつて、此が本門常住の三寶の本体であります、此三つの中一つが欠ても本門の本尊は滿足せんのであります、此三つさへ具足して居れば立派なる本門の本尊　確かに我々を濟ふて下さる御力があるのであります、うれから本化より外の菩薩諸天善神等、此は正義の信仰と致すものに御守護下さるゝお方々で、吾々が本門の本尊を信仰して南無妙法蓮華經と唱て居れば、到底にお惜み申さずとも守護して下さる、のであります、此僧寶の中には一切の菩薩も諸天善神も一切攝つて居て一つも欠げたものは無いのである、此御本尊の中には諸々が居らぬ祭らぬは成らぬとか、誰が不足であると云ふものは無いのであります、僧寶の事は此位で置きます、うてで、此本門の本尊は前申した通り、佛始め一切のもの揃ふて居らぬものは無いのであるから、此外に何にも祭らいでも、頼さないでもよいのであるが、この事を御妙判に

爰に日蓮如何なる不思議にてや候らん、龍樹天親等天台妙樂等だにも顯し給はざる大曼陀羅を本法二百余年の比はじめて、法華弘通のはたじるしとして顯し奉る也、是全く日蓮の自作にあらず、多寶塔中大牟尼世尊分身の諸佛すりかたざる本尊也、されば首題の五字中央にかゝり、四大天王は寶塔の四方に座し、釋迦多寶本化の四菩薩肩を並べ、普賢文殊舍利弗目連等座を屈し、日天月天第六天魔王龍王阿修羅王、其外不動愛染は南北の二方に陣を取り、惡逆の達多、惡婦の龍女一座を張り、三千世界の人の壽命を奪ふ惡鬼たる鬼子母神十羅刹女等、加之日本國の守護神たる天照太神八幡大菩薩天神七代地神五代の神々總じて大小の神祇等躰の神つらなる、其餘の用の神豈もるべきや、寶塔品に云く接諸大衆皆在虛空と云云此等の佛菩薩大聖等總じて序品列座の二界八番の雜衆一人ももれず、此御本尊の中に住し給ふ、妙法五字の光明に照されて本有の尊形と成る、此を本尊とは申す也、（日女御前御書外甘六十二丁）

とある此の通り本尊の中には一人も漏れては居らぬのであります、所が現今の法華宗の人々の信仰を見ますると本門の本尊の外に色々の神や佛を祭つて、本尊樣の中には不足があるかの樣に思ふて、信仰をして居ら

るゝは大なる過失である、大なる罪惡を犯しつゝあるのである、謗法罪を犯しつゝあるのである、誠に氣の毒である、今うれ等の人々の爲めに聊かお話を致しませう、

元來此法華宗信者に斯樣な誤りが出來た原因に就ては色々ありましやうが、只通俗の考からしてわけわからずの自分考へから盲目滅法に信仰するのが大分ある、其迷信へ貴僧共がつけこんで迷信鼓吹をするから、益々盛んになる樣になつたのであらうが、其迷信の出たのは、斯樣な考へからであらうと思ふ、一つは本門の本尊は一つである、少ない、狹ない、何だか物足ない心地がするところから、他に色々と澤山に拵へた、夫れから最一つは本尊樣は未來の成佛の事即ち死んでからの事をお願し申す、此世の中の事は御本尊樣ではいかぬ、他の神樣に願さんければならぬと考へたのと、先づ此二つ位が原因であらうと思ふ、

第一の本尊樣は一つである、數が少ない、狹い、物足りないと思ふ考へは、此は本門の本尊樣の譯柄を知らぬから起つた考へで、一つだから狹いとか少ないと云ふものではありません、本尊樣の中に皆揃ふて御座ると云ふ事は前に申上た通りでありますから、今譬を以て少々御聞を致しませう、譬へば一つの海と多くの河と何らが廣いかと云ふに、一つの海が廣いと云ふ事は直にお分りの事と思ふ、河が寄り集つて一つの大海となつたのである、今本尊樣も其通りである、諸佛諸菩薩諸天善神が寄り集つて本門の本尊と爲つたのであるから一の大海の如くである、本尊樣は一つでも廣い々々のである、決して物足りないと云ふ考へは起してならぬ、又如何程澤山の佛樣や神樣があつても、其思召は澤山にあるものではありません、佛と神と形は違つて居つても、其悟られたる道理を行ふて御座る道と云ふものは皆一つで同じと御思召である、今世華經に說て

說かれたる諸佛の本誓願は我行する所の佛道を普く衆生をして亦同じく此道を得せしめんと欲す

と說かれました、諸佛とは一切の佛樣で、一切の佛の本誓願即ち思召は一つであると云ふのである、諸天善神の思召が一つであることをは安樂行品に

諸天は晝夜に常に法の爲の故に之を衛護す

と說いてある、又普賢の思召を神力品に

我等亦自ら此の眞淨の大法を得て受持し讀誦し之を供養せんと欲す

と、又陀羅尼品には次の通りある

藥王菩薩　我今當に說法者に陀羅尼呪を與へて以て之を守護すべし

勇施菩薩　我亦法華經を受持し讀誦するものを擁護せん

毘沙門天王　我亦自ら當に是の經を持つ者を擁護し百由旬內に諸の衰患無らしめん

持國天王　我亦陀羅尼呪を以て法華經を持つ者を擁護せん

鬼子母神十羅刹女　我等法華經を受持し讀誦せん者を擁護して衰患を除かんと欲す

以上擧げましたる證據に就て見ますれば、諸佛諸菩薩諸天善神皆同一の思召であることがお分りと思ふ、其同一の思召は何であるか、只今の經文の中に言ふ、「我が行する所の佛道」「法の爲め」「眞淨大法」「法華經を受持し」「是經と持つ者」「法華經を持つ者」等と指しましたるは即ち本法の「南無妙法蓮華經」である、

諸佛諸天等は此妙法蓮華經を信仰し受持する者を擁護し下さるゝのである、此思召に背いて佛や神を別々に取出して信仰すれば　御利益を頂く事は出來ないのでありまする、今喩を以てれ晰し致しませう、茲に蓮華がありまする、此室には一、二、三等と區別がある、而して其數も澤山にある、此澤山の車室が何して人や荷物を運搬するかと云ふに、一節の「レエール」の上を往復して働きをして居るのである、佛や神樣も其通りで、佛や神と分れて澤山のお方々があっても、皆一節の妙法蓮華經の「レエール」の上に種々の所作を仕て御座るので、此題目の道を外れては働けないのである、脱線した蓮車の樣なもので、形は立派な一等車でも運轉することは出來ぬと同しことです、今神佛を御本尊の外に持出して祭つて利益を頂かうとするのは、蓮車の室を「レエール」を外して置いて動かさうとして居るので　決して動く筈はありません、何の御利益もある譯のものではない、お祖師樣は其事が一目に分る樣に中央に御題目を大きく、其側に佛神を列座してある、先に引いた御妙判に

妙法五字の光明に照されて本有の尊形となる

と仰せられてある、妙法五字の光明に照されなければ本有の尊形となつて充分の働きが出來ないのである、故に本門の本尊樣より外に出た神や佛は死佛死神であると御承知願いたい、本門の本尊は一つて狹いと云ふ樣な考へで外に幾ら澤山賑かに祭つても、一つも御利益は無いのであるから、たつた一つで御利益のある本門の本尊一つで澤山であります、

夫れから此御本尊は死んでからの事をお願み申すと云ふは、此も大なる考違ひである、うれは凡う神や佛の慈悲と云ふものは、現世とか未來とか但一世計である言ひ方樣な片輪の慈悲ではない、三世に亘つて利益を與へ呉れらるゝ圓滿完全の慈悲あるもので、吾人か信仰する本門の大本尊は現當二世共に救濟せらるゝのである、前申した通り「功德聚」と言ふて現世の功德も未來の功德も聚つて居る。未來は佛にしてやるが現世は御利益は遣られんと言ふ樣な本尊ではない、法華經の中に

現世は安隱にして後生は善處ならん、又、願ふ所虛からず亦現世に於て其福報を得ん　又、當に今世に於て現に果報を得べし

と云ふて現世の利益を受けらるゝ事が明かである　然し信仰の弱いものには御利益がない、御祖師樣の御新譯經の中に、

信心强盛にして深重なれば現當二世の所願決定圓滿ならん

と申されてある、信仰さへ强盛であれば現當二世の御利益を必ず受くる事か出來るのである、仍而各々には此本門の本尊の大威力あることを信して、誘法雜乱の信仰に陷らざる樣充分注意して、現當二世の所願を滿足せられんことを希望致します、先づ是れで本門の本尊は結論と致します、

（了）

本尊以外にいろ〳〵のものを祭るはゆ多き所作なり、譬へば
定まれる亭主ある女が他の男に氣移りするが如し、さても心
多き法華宗徒よ、なうたてき國民の心根よな（末寸巻）

不惜身命　常樂院日經上人　接前

在總本山　野口義禪　稿

○知見谷幽栖

丹波國知見谷は、上人法難後四五年は茲處に栖居せしものならむ。佛法を信仰するもの、上人を歸依するもの、日々訪ね來りて、法門の事、佛事の事、日夜無暇營み居たれとも、上人自身に取りては此栖居が如何に詫しかりしよ。當時上人が他に與へし御文書に曰「近レ死心はうく候附レ之年來貪着世間無行に暮し候を、うらみわひ候」又曰、倩廻二愚慮一徒然而送二光陰一無行慨焦胸。雖レ然驚レ思レ之經王有レ憑、無行而修二萬行一妙法兩字、一念歸二諸波羅密一唯無行怨レ面二根塵一驚覺二經王一遐無レ聚、妙即三千即三學、末レ修二萬善一自然塡

世間は上人が此栖居にあるも伺ひ増嫉して一日も安靜の地に在ることを欲せず、亦識する所となり、知見谷を逐はる、上人檀徒へ遣狀曰く「廿一箇寺より、丹波の奥山の洞に哀けなる、栖家をはらへとの使をたてぬ、愚僧の本尊を取あつめて、駿河へ遣し、御所を致二調伏一と訴へ、亦常樂院は謀義をするとて、廿一箇寺より所司代へ訴へられ寺を打破られ、弟子を籠に入られ、大怨敵と云ふ大怨しかけれら候」と當時上人が如何に滿天下を敵とせしかは、上人の諸書に徴して識るを得るなり。此時上人の身上如何に難障多き事よ、日蓮上人の所謂萬人に責られて片時もやすからざる境遇なり

（編者曰昨冬予丹波知見谷に詣す知見谷は京都を去る北方十有餘里の山中にあり人淳樸山清秀頗る別天地の感あり上人此地に到り初めて市川左門の家に寓し遂に寺を創建するに至る市川氏の家今尚在り頗る懷古の情に堪へざりき）

上人本迹勝劣抄終曰「數々見擯出の法難に逢ふこと、二十七箇所經王の文に叶事を喜ぶ」とあり一代の法難なか〳〵に申すも畏こけれ

○北國浪居

上人丹波の知見谷を出て若州小濱に至り茲に化を布き、本行寺なる、一字を創建せり然りと雖も何處も同じ風波蕭索上行上志の上人を容れ玉はず、又加賀へ向つて去る。加賀は三輪志摩の守が不信身命の既保により哀愍慈悲の教化を施すことを得たれば、上人を信するもの益多く、寺を建立するもの七つ、信者を得るもの數千、然れとも追究亦激しく、又加賀を出て越中に入る終に其行く所を知らず

越中富山神通川三里强の處に、日經坂あり、左側松原中日經上人の碑あり、側記曰元和六年庚申霜月二十二日、行年六十一才

○成　敗

上人と共に京都六條磧に於て、處刑を受けたる五人の弟子或は京都に或は加賀に死すと雖も、何れも其年月を詳にせず其外日耀日淨三十餘人其終る所を審にせず、獨り日尚關東にあり衆を師ひて盛に折伏を行せ

しかば、幾許もなく官の爲に刑に處せらる日向上人は伊豆の三宅島へ、本瀬院日逞伊豆の大島へ、田照院日清同大嶋へ、顯本院日遠京極刑部預り讃岐の丸亀へ常智院日悟松平中務預り紀州田邊へ、吉井東泉寺住持幡磨明石へ、光明寺住持松平備後預り石見大倉へ、砂田寂光寺住持松平大倉預り加賀大聖寺へ、高田淨信寺水谷伊勢預り、備中松山へ、何れも流刑に處せらる、時に萬治三甲子年九月なり

○了

嗚呼日蓮上人一代の形跡は失敗なり然れとも、寺を創する五十餘、弟子と稱するもの五百八十餘人、信徒を將ふる十萬人、一朝絶滅の悲運に遭遇したるも、天下百世上人の風を聞て、正法正義の士起るもの幾人なるを知らず是れ宗教家の失敗は却て成功を意味するものなり

開宗六百五十年紀念會祝辭

東京淺草區福井町　柿沼秀子

花は根に鳥はふるすに立歸り、くれ行く春のかたみをば、かきの山吹のきの藤なみに名殘りを止めて、世は新緑の眺めすゞしき此頃、我等の尊崇渴仰する日蓮上人開宗六百五十年の紀念會をこゝに開かれ、われら信仰を共にせる御方々ともろともに、花たちばたのかほりもゆかしき此宗教界の大偉人我法華宗の開祖日蓮上人の、遠く其古へを忍ばんとす、

すも、われらかよわき身を以てわらき浮世の風波に處して、つまづかず失望せずやすらけく日を送るは、けにや胸に燃へ立つ一道の光明、信仰の勇氣かれはなり、妙法蓮華經の眞理の經驗すみやさる處、眞念の露もはれ渡るべく、法燈のみ光りかゞやく處、もろ〳〵の罪も消へて行らむ、靜かに法華經の卷を開きて讀誦するの時、常に髣髴として胸に描かるゝは實に日蓮上人御一代の御苦行の御ありさまなり、我等處世のかゞみとすべき上人の御生涯、其悲壯たる御經歷勇剛なる御弘通のさま、けふのよろこびの御むしろにしばし語るをゆるしたまへや、

潮のかほりたかく、玉藻やくけむりゆるく、あさがとまやをめぐるの處、安房の國小湊の村はづれ、こゝぞ此の一大宗教家がとこしへに殘したまへる千古の御かたみなりけり、一日風なき波り澄平らかにして、水にきらめく日の光りうるはしき、貞應元年壬午の春、生れながらにして佛緑ふかき上人は、釋迦の涅槃とたゝへられれる、其きさらぎのもちづきの恰もあくる日、いうのふぜやに生れたまひ、吼々乳を求めたまひし善日麿、他日宗教界の混濁を叱咤すべき御聲にてぞありけるも尊ふとしや

頻伽は巣中にありてすでに其聲諸鳥に冠たりとかや、上人御幼けなくして御心ばへ人に秀で　自らなる御風采をうなへたまひ、なさけをしらぬあまが子のわるあがきに向ひまわらぬ御舌に殺生戒をときたまひしぞけにや他日迫害多き逆境に處して、撓まず挫けず終に法華の大旆を立てゝ人天の導師となり、衆生罪滅即身成佛を數へたまひし。抑も其御始めにてありけるなる御年とゝせあやまりふたとせの御幼年にして、沙門に御身を委ねたまはんと、密宗の靈山を以て名高き、こゝ房州清澄寺に入りたまひ藥王麿とよばれたまふ、御年御十八の神無月。綠色ふき御髪をうりてぼち、丈長き

振りの御袂を、色も香もなき墨染の法衣にぬぎかへて、御名を蓮長とあらためられ、分陰寸時を惜しみてはげみたまひ、今も世にいふかの凡血の笹の葉に、刺苦精髓の御かたみの御血汐の名殘りを止めたまふまでいうしみたまひ、深遠複雜なる佛法界の秘軌を探り、藴を究の奥を尋ねんものをと、佛の道にわけ入りたまひしぞかしこけれ、

偶まま立志一度孤杖雙鞋に御衣のみうでを掩ひて、なれしみ山を後になし鎌倉さしてのぼりたまふ、御道すがらかりねの宿の草枕、隅田川原のとある家にやどりたまひし折、邪法に迷信するやどのあるじの詰より、いよ〳〵にごりゆくてきわまりなく榮利に亘り空論に走る當時の宗教界の腐敗を歎じ、御涙に御袖をしぼりたまひける此御涙こそげにいよ〳〵御志を堅からしめ、御身を宗教の爲に捧げんと決したまひ、萬難の逆境にのぞみたまふ、御門出にてありけるなり

飽として天空に聳ゆる比叡の山上、谷間に出入る白雲は香火のけむりと相伴ふて、堂塔大伽藍の間にたなびきわたる其ひまに、上人靜かに佛法の奥義を尋ねたまふもの少時、去つて諸宗の風をも遍ねく探らんと、再び忽然山を下り、或は南都に赴き或は遠く高野に上り、東奔西馳御苦行至らざる處なし

かくて業成り故鄉に還りまして、開宗の御式を擧られてより鎌倉に出で、處々に御說法なしたまひては、馬鹿と共に迫害せられ、萬難交々至り、或は途に要擊せられ、或は時機を窺ふて草の庵りに行ひすまし、或は風塵あらき街道しかも反抗の聲喧しき間に立ちて宗教界の混濁を世に訴へたまひ、或は時の執權に御書を捧げて佛法の眞理をときたまふ、爲に他宗徒の憎び處となり名越の御庵は夜討せられ、當かに御身を以て逃れたまひしも、難に逢ふて益々振ふ聞法の御精神は終に再び鋭き舌鋒を以て、世をときたまひしより時の政廳に惡まれて、御いたはしや伊豆の伊東に流罪と定められ　法弟信徒の熱き涙に送られて配處へ船出したまふ、其海途風あらびしとて無情の舟子の爲にはなれ小島に殘されたまひ　嚴々御坐遊にうなる暴風雨、岩にくだけて狂ひ跳るあらなみの間に衣の御袖をかきあすせ、御聲はがらかにみ經をすしたまひしとき、御胸の感慨やいかにをはしましけん、あるは法敵の爲に狙擊せられ、漸くこゝを逃れ出でられ、雪のひとよを山腹の洞にあかさせたまひしこともあり、或は蒙古の來襲を豫言し、あるは天變地異交々至るは佛法壞乱して國勢穩かならざるの徵なり、速に邪法を禮へして法華に歸依すべきをときたまふ、其信仰の鞏固なる、其道念の熾なる、げに貴ふとしも尊ふとしや、かくて愈々他宗徒の迫害する處となり、問註處に召されて罪を糾さる、偶まま名越の御草庵に於て、滿腔の熱血を濺ぎて今法談の最中、左工門頼綱の爲に襲はれ、終にいましめられて刑場に送られたまふ、御途すがら他宗の者の罵り詈ふ其間を、肌膚馬にのせられたる日蓮上人辭色嚴然として少しも動せず、一歩〳〵近き來る瀕死の地、しかも泰然として憶するの御色なし、人もしる龍の口の御難とはこれにして、屢々刀刃の間に出入して猶道念堅固精神不拔なりし大宗教家も、岩にくだくる浪のとすごき龍の口の磯きは、あらごもの上に据へられし時の御心やいかなりけん、布教未だ全からず素志未だ貫かず、尊ふとき佛弟子の御身を以て凡夫の無情の刃の下に、あはれ今しきへてゆくらん御胸の裡の感慨推しはかりまつられ、靜かに觀念の御眼をとぢて讀經の御聲幽かなり、默にしづむ法弟檀越に向つてのたまはく、法の爲に斃れ法華經の爲に身を犧牲とするは願ふ處、我今身をすて、衆生後世の爲にせんとの

たまひ、神色自若として刎ねらるをまちたまふぞ尊ふとけれ、時しも黒雲低くとざして天日くらくとみるまに暴風強雨俄然として來り、此大偉人の終りを悲しむものゝ如し、偶々南條七郎北條氏の命を奉じて恩赦の令をもたらし來りぬ、危き御一命はこゝに助かりしも、一難去て一難又來り風波もあらき、絶海の孤嶋佐渡ケ島根へ流罪の御身と定まりたるさへ御いたわしきに、高弟二人又鎌倉の土牢につながれぬ、剛邁堅忍危機に出入するもの數回、死にのぞへて猶平然たりし日蓮上人、此事をきこしめして御袖をしぼりたまひ、われは越路の雲の末はなれことさにさすらひて、よしやあらぶる浪のもくずときぬゆくも、もとより法にさゝげし此身、何悲しむべきにあらねども、我爲に天日くらき土牢の中に呻吟する法弟らのあはれさよ、折しも木枯さゆる神無月、こよひの寒さみにしむにつけても、心若しきかぎりなりと、思ひやりたまふの情何ぞうるはしさや、あゝやさしの御心かな、法弟又獄中偶々橘の果を得て、流罪の師の房に捧げたしとこを抱きて涙にむせぶ、何ぞ師弟の情かくも圓滿靡優なるや、しかも上人御精神堅忍不拔大盤石の如く動すべからざるもの、間に於て、猶ひめゆりの花にむすべる白露の如きやさしの御涙あり、此御涙こそげにや幾億萬の衆生を罪の苦より救ひ出させたまふ博愛の御導とはなりたるなれ、上人配處につきたまひてより、大野の癩塚原の平漠たる廣原、僅かにたてるさゝやかなる辻堂の裡、雨さへ月さへもるべきあばらやに、頃しも霜月のさむうら、峰の吹雪を伴ふて御をもてをかすむる寒風は、身をもつんざくばかり、み衣の御袖はつらゝにとざゝれ、つもれる雪の中に座をしめて今は食さへつきたまひたる上人は、み經を心のかてとして合掌讀誦の御聲いとをごとかに、雪中苦行をつみたまふ、しかも猶御心は益々平固として、既にやまんの御精神

よゝかたし、終に文永十一年二月十四日、恩赦の命をうけ佐渡を發にして、翌日二十二日出発信徒の歡喜の聲の裡に迎へられて鎌倉にかへりたまひ、五月二日始めて法華宗門弘通のゆるし下りしかば、宗門信徒のよろこびたとへんやうもなく、法鼓を高くならしつゝ法華の威風を遠近につたへぬ、かくて上人は甲州身延の山頂、溪流ゆるく山腹を遶りてとこしへに天地の秘をかたり、谷間に笑ふ一輪の花千古佛法の秘奥をさゝやく、幽邃閑雅の間に一草庵をいとなみて猶行ひすまさせらる、弘安五年十月武州池上本門寺に於て十三日の卯の時ばかり、恰も紫雲たなびき天上遙かに樂のきこゆるが如き間に於て、靜かに入滅したまふ、うゝろに上人の御一代を追懐すれば、實に紅涙轉た点々たり、まことに衆生濟度の爲に御身をさゝげたまひ、にこれる宗教界を一掃せんとの御目的を以て、他宗數萬の反抗を一身に集めさせたまひ、然も一難來る毎に意々意氣昂然、終に法華の大宗を建てさせられ今日の盛大を致すに至りしは、まことに上人の熱血をうゝきたまひし紅涙の凝りてなりたるもの、げに偶然にあらざるなり、けふの莊嚴盛裝なる紀念會のむしろのすゑにつらなりたる、其よろこびのあまりつたなき筆をもかへりみず、はかなしごとをしたゝむれば、胸にもえたつ信仰の光明に、燦乎に映る千古の一大宗教家の其古への御偉、あゝ南無妙法蓮華經

○作西行臥錄

（作州吉ヶ原本經寺開宗紀念會報告）

松尾忍水記

本年本宗開宣六百五十年に當るれば、何れの地も紀念會を行はぬは無し、作州吉ヶ原本經寺よても五月十二

三の雨日をもて同じく是れが紀念會は擧行さるゝなり、予は开が會に列すべく同七日午前、岡山發上り滝車にて和氣へ向け出發なしぬ、豫て寺主より是非とて準備を囑托しられ居りたれば、斯くは數日を速めて行程にのぼりたる也、

頃しも春の終りなれど、四方の眺は始めにもまして何れ艶を競へば、山野河川眼に映ずるもの一として見あくべくもあらず、榮花、紫雲英は青麥に織り交りて綾、錦を色採り、名も得知らねど黄白紅紫、れのれ得顔は开はまた誰に誇れるにや、

乙女娘や腰より見ゆる榮たゝね花

肥かくる其人もまた春景色

蓮華草、花うのまゝの座敷かな

なぜ繪なけれど風雅はうゝろに胸にかよひしぞおかし。

午後一時頃和氣に着きぬ、うこより腕車に乘りて吉ヶ原に向ひぬ、吉井川に添ひて奇巖嶮崖の古城趾、天神山をうねれば山田とて風景佳絶こゝには信しき祥の眺あり、近く遠く淡淡たる山の風情、細く廣く迂曲せる川の姿狀、思はず人車を停めしめぬ、

帆をあげて歸る山田の高瀬舟海にもはしき眺なるかな

矢田と云へるに暫し憩ひて、周匝の濱に來れば何やらん昔ゆかしの高札あり、村の標示にもやと立寄れば本經寺の法會を知らせあるなり、都會の地は新聞廣告辻びらなど廣告自由なるが、田舍の廣告は又別なものなりなぜ心に面白く趣味ある氣にこたへたり、疊重せる山の麓、川の岸を縫ふて〳〵て本經寺に着きしは午後の五時頃なりき、和氣より此處まで路のり凡う七里なり、

本經寺は永昌山と稱し、作西勝田郡飯岡村にあり吉ヶ原とは其大字なり、此地四面山に包まれて、一流の河川ある處のみ平坦にて、人戸百ばかり有らん、寺はお寺山を背ひて南其川に對へり、川は津山川の下流にして鏡川と云ふ、吉井川とは上下とも接續して云ふなり、こは數日後の事なるが、津山より御來場の日至老上人は此の川の風景意に滿ゝてや、其名に因める一詩あり

美しき國に流るゝ川水は錦の色をうつしけるかな　日　至

青巒變じて錦の色いやまさる秋は、殊更この川の水澄めるさまの一入に優しくや見えなん、此寺疇昔三四箇寺の本山にて妙滿寺より隱退せし御坊の住めりし事もあり、檀家のもの等は學者の住むべき寺なりなど語れり、吉ヶ原一村は悉皆本寺の檀家なるとゝ、經石の其處此處へ夥多建てあるとによりて押し見るに、往昔は余程布教盛なりしものか、吉ヶ原法華とて京阪に迄昔は聞こゆ居りしなりと誇りがに語りし信徒もあり、什物には高祖の御真筆、開祖の御本尊、豊臣秀頼公の題目、經師の遺文　ほかに見るべき書籍等も少からず、中にも予の見當りたる掛軸に

行路倦時支拔笻　帽簷秋老夕陽春　江欄拜辨才天廟　雲外聞闘覺寺鐘

短世誰嘗論谷水　嘉餡久保鶴岡松　曾依遠日蓮師蹤　永々不傳英將蹤

とあり、この詩前建仁寺清啓天與老和尚の、相陽鎌倉舊蹤と題して作られしものなる由を、日敬と云へる僧附記せり、吾祖曾て安國一論を以て三誡せしに納れざりしが爲め、英雄が武器赫々の蹤も今はあはれに荒廢に逮べる樣を謂ひしなり、土地荒廢の實例を揚て亦聖祖一面の光彩を添へしもの乎、他宗僧侶の口を借りて此詩ある奇と云ふべし、

寺主を吉田日梓師と云ふ、曾て本多日生上人等と共に正義を主張して宗内の改革を計りし人、師信仰篤くして宗義に通せらる、數年來眼を病み爲に起居多く自由を得ず、而も教導倦むとなく最懇切なり、師は華美なる運動をなして名を望む人にあらざれども、一人も多く成佛を爲さしめんとの至誠家也、曩ごろ姫路妙立寺に本多上人と會せられし際、上人師を慰めて曰はるゝやう、師は今や病めり熱情の一分を盡し難かるべし、然れども喜べよ師と曾て誓ひし正義の發揚は、必ずや予の双肩に受けて成就せしめんと、師よろこびに堪へでや、只感謝〳〵とのみにて聲はやゝ曇りぬ、其誠實の程知るべし、予は師とは古くより交りあり、うの者きたる時など得も云へぬ笑もて、待つことひさしとて迎へらる、交情の篤ければなるべし。信徒の星賀、妹

尾、柴原等の諸氏は、既に準備に忙しくて其用意とりく也、

八日九日十日は、午前は幼童に當日讀むべき報恩文を授け、夜は女の子よわれらが罪の宗歌をさづけつ、時をりは大橋太郎の談なぞなして聽かせり、邪意のさとらぬひなが見は、其話に感じやすく聲をあげて泣くさへあるは最うれしく思はれたり、予はわれ等が罪の宗歌の外に準胝の御詠鷲の山風の和歌にも作譜し奉りぬ、勿論音樂には素人のことて、うれ〳〵の人の見んには拙きものならんが、唯至誠の茲に至りしもの、其潛上を笑ひ給ひう

（括字の都合あらんを思ひて風琴の譜に現したり）

三三四	五三—	六六五四—	四—五五六—	五五六—	
タチツ	タヌ—	ミノウキ—	タ—ねねね—	いてメ—	
七六—	七—	四五四四—	四—四五四三—	五—六—七—	
ふさ—ど—		タまノ———	ミノリノ—	ツ—ど—ノ—	
六六五	四四五三—				
さ—す	カ—ぬ—				

實地使用する時にはゆしく緩急平曲を知るべし、されど元より予の如き素人の譜、冀らくば此よりして完全なる作譜のあるべきを待つにはかならず、

十一日午前、九州御巡教より御歸錫の大僧正小林老上人、津山より川舟にて御着吉あり、隨行員には能仁、山名、原田の諸師及信徒林日法、神崎、武田、妹尾氏等四五の信徒なり、出迎には寺主、及武部勝外に海老茶袴の乙女等が三々五々打ひれて迎へて行り、この日[illegible]の樹に蔭みれる二本の老松さへ、學徒日ごろにまして、其さま御出迎へるにも似たりげり、

出迎へる人にはさこう松にさへ心ありげのふりは見ゆめり

とて予は取りあへず之を人々に示したるに、高木氏は以後出迎の松と云ふも興あらんとて笑ひぬ、上人後に之を聽き給ひて

出迎の松の緑にいろ添し海老の袴の稚兒ぞ床しき　日　至

の詠あり、

十二日正午よりいよ〳〵法會は營まれぬ、大導師は大僧正なり、嚠喨たる宗歌音樂と共に、整々として數多の上人は席に着き給ふ、最莊嚴なる紀念會初日は行はれぬ、信徒總代倉地氏の讃歎文、續て幼き童子十數名の報恩文あり、何れも優しき限りなり、殊に袴つけたる乙女稚兒の手に〳〵櫻、桃、牡丹、菊、紅蓮白蓮の作り花を持ちて、上人等の挑道に從ひしは最殊勝の事なりき、終りて寺主吉田師と能仁師との前座にて大僧正の說教あり、此日參詣人聽衆俱に堂に滿ちて法益いと多かりき、

夜は客殿にて演說あり、（開會の主旨）武田保太郎、（信の始末）林日法、（顯本法華宗萬歲）山名木信、の諸子にて最後に老上人（同に似て異なり）の演述をなさる、敎化諄々赤子に乳をふくましむるにも似たり、此夜予の演じたりしは（肝要中の肝要）と云へるなりき。

十三日正午同じく大法式は執行し了んぬ、原田能仁二師の前座にて老上人の法莚は開かれぬ、數日の信徒只隨喜一念の外もなし、夜は（宗敎客体論）原田容廣、（開宗の元意）能仁事一の兩師終りて老上人御着座あり前の夜の續論は懇々として說き終らる、法雨は等しく衆座一面にうるほひしを知らる、予の當夜の演題は（信念成佛義）なりき。

此日の事なり、土地の信徒の老上人に御揮毫を乞ふもの三四あり、其内のある者へは予の

我等が罪は御佛の、　おほけき慈悲に救はれん、　さても嬉しや園近し、　勉めて篤く信じなむ、

妙なるみ法の香ばしく、　吹來る鷲の山風に、　身の浮雲も晴ぬれば、　心の月も牙ゆるらむ。

の新詩を書き與へて云はるゝやう、子の此歌至る處幼童小女の口にのぼり、物の道理のしかとわけがたきものにも、及ぼせし感化の利益は少ながらず、されど未だ誰人の筆に寫されたるをも見ず、今野僧の之を記して永く子が功を傳へなんとて微笑せらる、此歌もと岡山に於て嘯嗟の間に作りしもの、殊に某氏の與へられし作譜に音調の通せん事をのみ心がけて認めたれば、うたひては兎に角、文字に寫してはげに恥かしきこと節のみ、さるに上人の深き思召し感銘のほかはあらじ。

さきに記るせし老上人が美しき國の和歌ありしは今日なりき、原田師も傍にありて

錦川流るゝ水のれはけきは木々の綠のしづくなるらん　容　廣

と詠ず、さて又此川に瀬あり新らしき瀬にて名なし、土地の人の予にふさはしき名をと云はるゝまゝ

なりやさぬ妙の御法の經ヶ瀬は御世萬歳の數なりけり

と示せしに、經ヶ瀬とは嬉しなど持はやされて、年まだ若きわれの恥かしくも覺ゆし、

十四日の朝山名林の二氏は周匝に向け先發しぬ、原田師は津山へ其他の信徒もうれ〳〵歸路に着きぬ、而して老上人と正午頃より河舟にて和氣へ下らるべく、隨行には予と高木氏と及吉ヶ原の信徒妹尾桑治郎氏とは定りぬ、愛別の袖になりごりを包まれて、數十の信徒と吉田師とに河邊迄は送られぬ舟は岸を離れて經ヶ瀬を投ぐるが如く下り行きぬ、舟中風琴の音は送りし人の耳にはなゞ聞ゆし、陸には直ち起る上人萬歳の聲。

舟中は吉田師の心づけにかゝる清酒に漸く和する法談佳話、川を挾める兩の山は如何に我等が談話を傾聽せしゞ、日ぐれの頃和氣に着きぬ、吉田完亮師、長谷川其他の諸氏も既に河邊に迎へられ頓て本成寺に入寺あり、山名氏等は既に着寺ありて、其夜に此處に法話あり、こゝ本成寺は風景に富みたる名刹なり、庭に龜鏡の松と云へるがあり、うねりくねれる枝の桑へたる名木なり、予は例の横好の野心ひら〳〵と芽して

幾世をは經ぬらむ庭の龜鏡松みさほの姿うつしてぞ見る

十五日雨は篠をつくやう風さへ交ふれど出發の期は變へがたくて、午前の列車にて上人の一行は東播磨に向け、予と山名師とは相携へて岡山へ歸りぬ

（終り）

續一夢報

高木松太郎

○至師隨行日誌

予は四月五日津山より岡山へ來りて予と會せられし山名譯の動靜より日至上人の隨行を愚立たる也

四月六日　日至老上人は東京大岩金之助及周防國秋林寺吉田義掌師の京都大法會に昇らるゝを隨へて姫路に御着あり、此處より大岩氏は直に袖を分ちて歸東せらる、大岩氏は岡山に於て日容上人法要以來獨り老上人に隨行して、廣島其他の長旅に侍す、感すべき事也

十日　姫路の法要も終りたれば、老上人には午前九時四十三分廣嶋へ向けて姫路御出發あり、隨行には山名木信師と予となり、野老能仁三宅庄次郎同六造外四五の信徒に見送られたり、此日朝の間姫路を立つ時は晴天なりしが、備後路にかゝれば寒さ特に加はりて雪粉々として車窓を打つ、まことに不順の事なりかし然れども幸に野老師よりビールを心附られたれば、うれもて僅かに寒さを忘れたり、午後三時三十二分廣嶋妙詠寺に御着。九州よりは老上人の愛弟至誠家を以て

聞へたる久留米の白本通教師は、九十里の道を送しとせずして既に來廣あり、山本師は老上人とは一別して以來七年の面會なり、積る思や懇慕の情さこうと傍にも見受られたり、げに涌出品に於ける世尊安樂少病少惱能化衆生得無疲惓の問訊もかくやとぞ推せられし、山名師に至つては短かき言葉の其内にも、初對面にも似つかぬさま一見舊友とは斯の如きを云ふなるべし、

間もなく大橋日曩師來らる、寺主島田顯恕師のもてなしは懇切なり、さて山本師は吉田蓮華寺の高田日暢師に、兼て書面の通信にては交りあるも未だ一面識もあらざれば、此機を幸に是非に會ひたしとの事也、幸を見かね給ひし小林大僧正には自已の名にて高田師へ來るへく打電あり、之れを受けたる高田師も明日は舊三月三日の節句なれど、取ものも取あへず夜車を馳せて十一日の朝八時頃妙詠寺に着かれたり、山本氏の喜悦さこうと思はる、高田氏の來廣の夜は時分には珍らしき降雪にて、可部あたり三寸市中も一寸の積雪あり

十一日　は同志の會合を機とし風景清楚たる宮島にて快談せんとて、午前十時十五分廣島發の列車にて宮島驛へ着、うれより舟にて宮島へ渡り、同所に名高き紅葉の茶屋の樓上に上りたり、風景は佳絶なり珍膳は

前にあり、談論自ら盡きん樣もなく、さて山本師は發言して本土と九州との布敎聯絡こう願しけれ、由來九州は寺小にして少なく、思ふやうの運動もなしがたしさりとて廣宣流布の金言もだし難しとて熱心に之を述ぶ、滿座忽ち賛成可決す、因て大僧正に立會の命名を乞ふ、大僧正日蓮聖人の正義を發揚するもになれば蓮正會と名けて然るべしとなり、尙ほ山名師は從來中國聯合布敎なるものあり、思ふに之を擴張する方法を交渉せんと云ひ先づ茶は山名師をして蓮正會期成委員に選定せり、皆々茲に於て萬歲を三唱して歸路に着く、予か云ふ迄もなきとながら、宮島は本邦三景の一其美觀我等が筆にはのぼり難し間もなく宮島驛に歸り、此にて大橋島田高田の三師と袖を分ち予等は大僧正山名師山本師と合せ四名其夜十一時十九分の下り列車にて九州に向へり、馬關に着きたるは翌十二日午前五時也

十二日　馬關より小蒸氣にて門司に渡り、午前六時門司より久留米行の列車に乘り、小倉を過ぎ箱崎より博多に至り、而して久留米に着きたるは正十二時の頃なりき、出迎の人々には柳川妙經寺の岩井臺交師、渡瀨新興寺の吉塚通英師等、總代人仙波德義、橋市治、平岡藤助、立保太郎、淺見林惠氏等をはじめ三十餘名の信者と停車場に小休憩の後、人車を連ねて本泰寺に入る、先づ寺門には一天四海皆歸妙法後五百歲廣宣流布の二流の旗を建てり、三時頃より說法あり、前座は山名師にして老上人御親敎あり、夜は七時頃より演說にて

一、吉塚通乘師　二、山本通辨師
三、山名木信師　四、大僧正御出席

聽衆は二百名ばかりなりしも皆正直篤信の人々なれば信心師に銘せしなるべし

十三日　當地は山本通辨師七年以前東京より歸國後寺內の淸正公を取除き種々の批難を排斥し、一意專心に經營して今は非常に信徒の尊敬を受くるに至れり、又老上人の御來錫に就ては暫師以來始めての大僧正御巡敎の事とて、七十名の信徒ば上人御宿錫の間宿り詰にて聽聞せるは寄特の事と云ふべし、之はさて置き當日は開宗紀念大會の正式日なり、聽衆は堂に滿てり法要は終れり、說敎順序は先づ吉塚師、次に岩井師、次に山本師、次に山名師終りて上人の御親敎あり、就中山本通辨師が如說修行抄を讀むや、感極りてか語つまり涙標をうるほふを見たり、上人の御深切なる敎訓に至りては、聽衆皆感泣せざるなかるべし、夜は八時より演說開會演題辨士は左の如し

函蓋相應　山本通辨師
大曼陀羅發現　山名木信師
即身成佛論　小林日至上人

聽衆は日々聞傳へて遠近より集り來りて、前日より增信せし

十四日　柳川妙經寺の信徒淺沼林惠氏は岩井師と謀りて、上人を柳川に迎ふべくやう決し、岩井氏等一先柳川に歸らる、

夜八時演說開會す、山本山名の二師順次登檀し、主任辨士老上人登檀御親敎あり、終りて念佛樓徒藤某質問せしが、山名氏の應答ありて承服せし

十五日　雨降る、午前八時四十分山本師と共に久留米を發す、九時過矢部川着、岩井淺沼氏等の出迎あり、これより腕車にて筑後柳川妙經寺に入る、時に十時過なり、即日法要あり、終りて午後三時頃演說會あり、時しも夜來の雨にはかに晴れたり、皆々其晴天に眉を開けり、辨士は岩井、山本、山名の三師最後に上人の登檀、各特意の辨舌あり、此日新宮公園に浩然の氣を養ふ、夜は八時頃より開會山本山名兩師、後に老上人の懇切なる演舌あり、聽衆存外に多かりし、九州布敎は之にて終れり、其夜より上人長崎の御勞れにや風邪の氣あり、岩井氏急き醫を迎ねさて、十六日の朝は元の氣に復さる

十六日　熊本を一見せばやと淺見氏の隨行ありて、都合四名九時過の列車に乘す、矢部川迄山本師と市本市治師氏と送らる、今日は巡敎第一の好天氣にて、山名氏は滝車中一句を示さる

柳さへゆるかぬ今日や滝車の旅　木信

このあたり菜花盛にして此土地の名物なりとぞ、南關高瀨の兩岸、千人塚、田原坂、植木、など西南戰爭の古跡見すごしながら、上熊本驛に着きしは正十二時六分なりし、これより本妙寺淸正公祠癩病病院など見終りて六師團に出公の築きし古城、さては百軒百崖など見て、水前寺公園水明樓にて晝食を爲す、園は細川公の造營にかゝる、其人々の遊べる樣自由にまかし、げに時代的の公園とこうは思はれたり、上人等は寫眞など買取りて此處を立つ、午後六時四十分熊本を發して久留米に向ふ（未完）

附記名所舊跡をさぐり、風俗習慣等に感じたるもの多けれど、別に筆を執る事とせん

○岡山通信

中川事顯報

▲篤信會演說會　例により五月廿八日山崎町本行寺に於て、佛敎篤信會定期演說會を催したり、是より以前彼の辻びら新聞廣告の如き幹事及準備員の手に於て完全せり、當日は日蓮宗運成寺に於て開宗紀念會を行へるにも拘らず、正義を慕ふて集れる聽衆四百名を出たり殊には當日遙々美作より影山謙二氏の來會せらるゝあり會上一層の花を添へしの催ひあり、午後七時開會出席辯士演題は左の如し

開會の主意　中川事顯
勿誤解雲之下人　影山謙二君
宗敎趣味を有せざるの弊害　松尾英四郎君
本門本尊の尊光　山名木信師
壽量顯本の統一義　能仁事一師

而して予は現今人情の薄きは一に佛敎の盛ならざるに起因するを說て、我等が盛に佛敎々義を唱道する所以を述べ、影山氏は人間は未だ大見地に達し居らざるもの也、然るに唯佛與佛の境界を兎や角と誤解斷決せんとするの俗見者輩を、多く法政上の比例に借つて滔々議論して聽を下る、次に松尾氏は先づ趣味の解を說き次に人は趣味無らざる可らざると、趣味を有せざる弊害の實例を擧げ、趣味に高尙あるとを云ひ、人は最高趣味を味はさる可らざる事より、最高趣味は宗敎にあるとを文學方面より論及して降檀す、山名師は法華本門の本尊はあらゆる尊高義を蒐めたる旨を說き、而して本尊尊光の形容を特意の辨もて之を細述して下る、能仁師は諸經敎說の義は法華經に歸し、而も壽量顯本は幾多敎法の統一都府なるとを、例の快辨もて之を論じ盡して降檀す、此夜津山の日蓮宗貫名見祐氏幷に不受不施派の僧侶等三五人見受たり、近來門下親睦の傾向あるをりからなれば、殊に其說ょ耳を傾け居りしが如し

▲本宗と日蓮宗日宗會　當地日蓮宗蓮昌寺に於ては日宗會なるものを組織せしが、右發起人は市會議員等の名譽員外に田中常次郎氏等にして、其主旨とする處は現今日蓮宗の宗態を嘆きて、一は之を克復し一は國家の福祉を計らんとするにあり、本宗須山茂三郎氏及久城氏等の間に於て數回の交渉あり、以來同盟して步調を一にし、本宗信徒等も加盟するとになして、時々演說會及講演會を開かしめ、能仁師にも出席を乞ふとになしたり、日蓮宗の方よりは大橋玄章氏講師として出席すとなりたり、願くは斯の如き會の爲に、一日も早く聖祖の眞義發揚せられんとを祈るものを

●聖祖門下の統一事業

兼て報道せし如く本年四月廿九三十の兩日、神田錦輝館に開會したる聖祖門下各敎團の宗徒大會に於ては、祖訓に則り宇內宗敎統一の機運を淳熟せしむる第一着步の運動として、聖祖門下各宗派の一致合同の緊要を認め、滿場一致を以て各管長に勸告書を奉呈することに決せしが、同會の代表者たる中川觀秀、小倉豐三郎、鷲塚清次郎、飯田完祀、島田堯惇、本多日生、山根顯道、田中智學、小笠原日穀の諸氏は去月廿六日以來各宗派の宗務廳を歷訪し、大會決議の趣旨を詳述して贊同を求めけるに、日蓮宗管長濱日運大僧正は津田宗務監督外一名を隨へて面會せられ、親しく代表者の陳述を聞取大々的賛同の意を表せられ、顯本法華宗管長藤乘日遊大僧正(病中)代理宗務總監長谷川僧都も亦應員一同を率ひて會見、開祖日什上人已來の希望たる旨を述て賛同の意を表せられたるよし、今其勸告書なるものを得たれば左に掲載せん

宗門一大事勸告

拜啓爰て江湖諸新聞雜誌の報道により御了知の通り本年四月廿九三十の兩日を以て錦輝館に開きたる吾本化門下宗徒大會は公平に聞宗の輿望を代表して將來に要すべき宗門興振の重要議案數項を決議したる中特に本宗各敎團の當路に通牒して深大なる御賛同の下に成効せしむへきは各派合同統一を實行して本化一大宗門の圓滿成立を期するに在り顧ふに四海同歸の聖訓によりて起れる宗旨にして自ら分裂割據の陋態に陷りつゝあるは議論を須ゐずして其大不可なることを知るべし古來有識者の之を慨歎するもの各派その撥を一にせざるなしと雖未だ其時機を得ざるが爲め荏苒姑息今日に至れるのみ今や宗徒大會の名によりて集まれる各敎團の志士は互に其胸襟を開て至情を吐露し輿論の先驅として提案審議熱望快決する處斯の如きは既に業に時機の淳熟を證して餘りあり と謂つべし願くは貴宗道俗の絕待賛成を得て合同統一の實行を大成せんことを

右宗徒大會の決議により謹て御勸告申上候尙貴宗に於て本決議の大体を是認せらるゝ上は其合同統一に關する詳細の方法は委員を擧げて御協議可致都合に

有之候敬貴宗委員を適宜御定めの上御通知被下度併せて申上候敬具

明治三十五年六月廿六日

宗徒大會代表者

中川觀秀
小倉豊三郎
鷲塚清次郎
飯田完祐
鈴田堯惇
本多日生
山根顯道
田中智學
小笠原日毅

其他の各宗派も皆多くは賛同せられたるよし。尤も事躰容易ならざる重要事項なれは、愈々統一の捗ひに至りなば、各派撰出の委員間にそれ〳〵條件を以て協定凝議の事となるべからんが、何れにしても統一聖業の進行吾豐は雙手を擧げて賛同の聲を放つに吝ならず哉、

○東亞佛教會の無主義無定見

櫻木谷僧正の誤迷說——お面——參ッた

山田豊次郎　報

編輯局各位、昨入日品川東海寺に於て東亞佛教會の演張演說有之候、小生の傍聽に出掛け候時は既に一二辯士の演了後にて候ひし、纔て天台宗の高僧櫻木谷慈薫大僧正の登壇を見受申候。大僧正は開口一番論じて曰く、佛教各宗の祖師は何れも權現の顯埵なり、傳教、弘法、法然、親鸞、日蓮何れも偉人ならざるなしと其開宗の云爲一代の傳記を縷々辯せられ候、就中日蓮上人の强義折伏を非常に賞讃してさて言はる、樣、上人の所謂四個格言は一宗樹立の必要上止むを得ざるに出づ、是れ時に取りて頗る可なるものあるを見る、されど今日の日蓮宗徒が何日迄も其舊株を墨守するは最も不可なり、今日は佛教各宗和衷協同して外敵に當らざるべからざるの時なり、此時機をも辨へずして頻りに念佛無間禪天魔と云々するは所以なき事共なり、尤も念佛無間と云はれしとて念佛徒が之に對して兎や角騷ぎ廻るにも及ばず、四個格言は畢竟今日の各宗にとりては何等の痛痒をも感ずべきにあらず、要するに佛陀の教法は聽病與藥にて何れも勝劣なし云々

編輯局各位、大僧正の演說は右の如き議論にて候、さて辨了降壇の間際、小生等が同行の顯本法華宗信徒福原豊次郎淺尾清造の兩氏は刺を幹事に通じて、只今大僧正の御論説中了解に苦ひものあり一二質問仕りたしくことは愛敬の事を承るものかな、衆流海に入る其海を以て極樂に譬ふとは我等今日聞き始めなり、願くは言はる、處其經典の本據を示されたし、我等は法華經藥王品の十喩中、衆流を以て爾前四十餘年の諸經に譬へ大海を以て法華經王に喩へられたる金口の明說を仰ぎ信ず、是れ明かに法華經を中心として佛教統一を示されたる如來の金言なり、然るに分裂的諸宗の教義を何れも皆な是認して勝劣なしと云はる、は、是れ則ち貴下等東亞佛教會の無主義無定見を表白せるものにして佛教統一の如來旨に背くものと斷言するに憚らず、貴說如何、於是大僧正は如何にも藥王品には其通りに說かれたりと言はれしのみ　極樂を海に譬へたる經典を擧示せず又擧示すべくもあらず、福原曰く然らば貴說は前後矛盾にあらずや、何となれは前には大海を極樂に譬ふと云ひ今は藥王品說に首肯す何ぞ曖昧なるや、抑も亦日蓮上人の四個格言を一宗樹立の爲とは一定の御申立ありや、日蓮上人は如來の遺勅を奉じて紛亂せる佛教の統一を唱導せられたるもの、所を研究せずして無意味に佛教各宗勝劣なしとは沙汰の外なり、大僧正とも呼はる、方にお似合もなき無定見ならずや云云

編輯局各位、此處に至りて大僧正は語塞り姿容乱れ見許さる、如否を問ひしに、幹事は大僧正に照會の上別室にて其質問に應答すべしとの仕儀に立至り申候

編輯局各位、斯くて小生等は福原淺尾の兩氏に尾して導かる、まゝ別室に打通り申候、軈て席定りし後兩氏は懇懃に會釋して徐ろに大僧正に左の質問を試みられ候、曰く只今の御演說にては佛教各宗何れも勝劣なしとの事に聞取り候、果して然らば各宗の依て以て宗旨とせる釋尊五十年の說法一代五千餘卷の經典には何等の勝劣もなきものにや、大僧正曰く勝劣なし何れも機に應じて得益あり、福原曰く我等は顯本法華宗の信徒にて常に導師より之を聞く、法華經本迹二門に亙りて一經三段二經六段あり、如來一代の說教亦序正流通の三段ありと、然らば勝劣あるにあらずや如何、大僧正曰く如何にも序正流通はあり三段には勝劣あり、されど所は教相上の差別段なり、法華開會の上には何等の勝劣なく一妙法なりと云々、福原重て問ふ然らば現在八宗九宗と分れたる分裂的宗旨を其儘一妙法と云はる、か、大僧正暫く躊躇してさて言はる、樣、諸河海に入りて同一鹹味なり何れの宗派も皆大海に入りなば勝劣なし、淺尾曰く只今仰せの所謂海とは何をさすものにや合譬を承りたし、大僧正曰く海とは極樂なり、淺尾曰

るも中々氣の毒の御有樣とはならられ候、之を見て取りし隨身の者共大僧正に向ひ、れ嘲中ながら御先約の某氏より御迎ひの車來れり早々御支度あれと、大僧正は得たりと倉皇辭謝して餘よく逃げられ申候

編輯局各位、此應對中二時餘を費し候、一方會場に於ては二三辨士の演說ありしかども、淫祠攻擊の外別に耳新しきものも無之りし由同行者の或者より聞及申候田中舍身居士も釋雲照律師も演說せられず否出席なかりしとの事に候

編輯局各位、品川の土地に來りて斯る誤魔化し演說の首尾よく仕遂げらるゝと思ひしが、抑も彼等東亞佛教會の誤迷想に候、東亞抔片腹痛き口廣な申分小生は嗒呼の二字を彼等に與へ度考へ申候。敬具

（七月九日舟）

▲宗徒大會決議實行期成同盟會　紀念大會の殘務は小倉常置委員主在となり鷲塚、中川氏等之を補助し、略ぼ完結を告げたる由なれば、引續き見出しの如き同盟會を組織し、近き將來に於て普く全國の同門志士を糾合して大會決議の遂行を期し、社會に向て大に活動せん筈なり、圖員諸君よ請らくは大々的奮勵もて、僧侶は悉く當年の六老僧を以て任せよ、信徒は四條金吾となれ富木番勇守を學べ、至望至囑。

▲大會顚末錄の發行　遲くも去月中に出來發送の手筈なりしも、大家の演說速記及宗徒大會の議事速記等を擔任せられたる增田聖道君多忙の故を以て飜譯に手間取りたると、大會務の存外累積蝟集せる旁非常に延引せしが、今や小倉委員の手に編纂全く其終りを告げ、一部の冊子となりて夫々發送濟となりし由、尤も該冊子は壹圓以上の義捐者に限り紀念として進呈するも筈なるも、特別希望者には製本實費を以て頒與するよし、因みに該書は其名の如く紀念大會に關する一切の記事を網羅し、添るに上野公園式場の光景を寫せる石版密畫（紀念圖繪に掲けしものにあらず）を挿入しあり、頗る恰當の紀念品たるを失はず、實費は約り貳拾錢位のよし聞及べり

▲感謝狀　大會顧問、協贊員、準備員、常置委員等に贈るべき感謝狀の石版印刷出來、夫々大會事務所より發送せられたるよし、今其寫を得たれは左に掲ぐ

感謝狀（顧問に贈りしもの）

本化開宗第六百五十年紀念大會を中央帝都に擧行するに際し本會の淨業を翼賛せられ振古未曾有の盛儀を遂行すると共に祖道復活の一大動機を喚起し聖祖の靈德を宇內に光揚するに至りしは貴下盡瘁の功與て多きに居れり茲に感謝の意を表し併せて將來新に興るべき宗門的事業に對し層一層協賛あらんことを切望す

▲千葉縣の開宗紀念法要　千葉縣山武郡松尾町田越妙圓寺住職園員金坂義昌師は、去る四月一日午前十時より横溝日乘師を大導師として其住職地に開宗紀念法要を嚴修せられ、畢りて午後演說會開設横山會場、笹川眞應　横溝日乘の諸師何れも熱心に統一の妙義を顯揚せられ、眞言天台等の權宗徒多き土地柄として法益多々なり　田　同月翌二日は其業務地成東町本因寺に同前の紀念法要演說會を開催せられ、是れ亦非常の盛會なりし由無益巷居士なる人より通報ありたり、吾曹が千葉地方の圖員中に紀念會擧行の事ありしを聞くは之を嬉矢となす、さても七里法華僧俗の呑氣さよ

策振の大動機を促進することを得たるは偏に顧問各位が宗門重望の資を以て克く書策輔導を垂れたまへるに由る乃ち宗徒大會は滿場一致の決議を以て敬意を具し虔て感謝狀を閣下に奉呈す

明治三十五年五月一日　宗徒大會

感謝狀（常置委員に贈りしもの）

宗門未曾有の盛事たる開宗第六百五十年紀念大會の開設に際し其常置委員として純潔なる淨役に盡瘁せられたる貴下の功勞を多とし宗徒大會滿場一致を以て感謝の意を表することを決議す

右決議に基き虔て感謝狀を呈するもの也

目　錄（鷲塚小倉中川飯田の四氏へ）

一高祖遺文錄　三十卷

開宗第六百五十年紀念大會に付き貴下が極詳なる盡瘁を感謝し其甚大の功勞を表彰せんが爲め宗徒大會は滿場一致の決議を以て上記目錄の紀念品を貴下に進贈す

又協賛員及準備員（中央　地方共）諸君へは顧問並に

團友消息

▲松尾忍水君　久しく岡山地方にありて商業に從事しつゝ本團の擴張に盡瘁されし忍水松尾英四郎君は大に所感ありて北海道に渡り上京されたりと聞く此間三年は在京のこと自今益々本報紙上に接大の筆致を見るを得へいちん

▲清澗貞雄君　大阪の教界に其人ありと知られたる三宅道人清澗貞雄君は昨年以來宗史の編纂に從事されつゝあるが事業中々多不容易の事にて非常の勤精を以てして尚ほ且つ其中ばにだも達せざるよし愈々出來の上は隨分の大部ものとなるとならん

▲石淺日錢君　ほの〳〵と明石の濱に風月を友として一時詩酒三昧に餘念なかりし江東石淺君は近頃非常に感する處ありてもはら統一事業に精勤ぜられ本年伊豆伊東に於ける第二回夏期講習會には是非出席されるよし編者の許へ通信ありたり驅馳たる風雲に接し亂酔無聊の話題を選ふするを見るも半月餘の後にあらん

▲編輯部各位　小林老師の御逝去あり！已來當地の教界益々有望と相成申候小生等亦滿腹の熱情もて益々統一事業の擴張に竭力可仕候お蔭を以て地獄行の他教徒追々歸順し來り最後の教濟を本佛釋尊に帰ふの徒輩出仕候就其、筑後久留米本泰寺山本通浮

▲山梨學校　能視益々御勇健奉賀候春來開宗紀念法要の儀其節にも此處にも暴行せられた統一の機運益々促進の事喜悦此事に候若前何の爲すべき事も無之候得共幸に瓦全者經營在可被易貴意候時下不順幸に御愛自愛斯道御奮勵有之度知己諸君へ次手ながら宜敷御攻撃番上候頓首、北海道札幌郡對雁村法華寺老納荒川智會

祖書綱要

出版終結
製本披露

●著者、故一妙院日導大和尚●校訂、小林日薫大僧正●著者實傳、田中智學先生●全部廿三卷●木版彫刻●印刷大本●代價八圓●重量一貫五百目以內●發送起點地東京●運送小包郵便の規定に依る●購讀申込期は、本年七月拾五日限●發送期は、本年八月廿日より始ひ

⊙代價半額或は全額既に拂込濟の御方は更に申込を要せず

⊙豫約申込のみの御方は發送期日迄の內に代價及運賃共御送金及申込場所は、熊本縣飽託郡花園村本妙寺中東光院內祖書綱要出版事務所宛⊙送金宛名は、出版會計吉岡日顯宛⊙金員領收の上は必ず領收證を發す

右豫約の購讀者に告げ更に續續申込を待つ

肥後　綱要學會出版部

僧俗同信會連名表（つゞき）

（岡山縣）
三村友吉　武田保太郎　小玉象三郎　玉置圓次郎　山名齊吉　妹尾利太郎　池田藏造　林菊勝　中村建男　難波林平　谷口榮藏　宇垣宇三郎　伊原重三郎　吉田岩三郎　安氏象太郎　藤原壽次郎　松尾英四郎　平田大吉　福永次郎　北田藏一夫　三宅廣　中川事　小野顯　須山茂三郎

（廣島縣）
大橋日巽　田川八重　島田顯　木村孝　高田日暢　吉田安次郎　提正音　小田龜吉

長谷川久造　坪井庄吉　岸本龜二郎　武田久吉　神崎ツギ　玉置繁藏　神崎龜四郎　田口政藏　林伊太郎　山形正一郎　川崎福太郎　吉田鶴七　久城多吉　小野二　三田常二郎　加島虎吉　金光清二郎　横山鉄太郎　吉川濃　有松久藏　三澤増　三造　丸山

方山恒太郎　延原壽美太　三木勢治　藤田定市　妹尾增次郎　神崎虎藏　多羅尾務　谷口忠次郎　武生萬作　三輪金之助　綾野忠義　久城治作　橋本九三郎　高原傳二郎　高見九平　金光彌一兵衛　城崎作太郎　野上壽惠吉　大熊虎太郎　內藤武八郎　三宅植夫　三鳴春二郎　兒島

吉岡熊太郎　松本貞次郎　井上幾次郎　妹尾近太郎　谷口早太郎　妹尾勝馬　原田佐吉　妹尾平二郎　上田竹次郎　小林傳六　久城茂太郎　栗原壽太郎　桐野紋七　松田清吉　辻岩重　橫山藤吉　高木三次郎　能仁三郎　島越衛三郎　松原熊次郎　小松仁次郎　小笹重次郎

（福島縣）
大多和幸英　三田村義俊　木村啓門　日順　萩原內藤　岩井智厚　白井喜久治　杉本子三郎　桑原ヤス　野口佐平　平岡安太郎　山本通辨　小西拾次郎　廣野忠勝　矢野幸一郎　伊藤憲供

（鳥取縣）
（福岡縣）
桔梗開章　市橋鑑藏　岩井聖交　成井平八　吉塚正太郎　田中ヨネ　宮川謙吉　珠寶子　山岬シゲ　黑田ツヤ　田中卯三郎　前野正夫　橋本市二　橋本平八　吉塚通榮　前田シゲ　寶子黑田ツヤ　田中卯三郎　橋本平岡　橋本市二　藤助　入江・壽平　吉田義章　入江寛六　世羅平　西田世羅幸二　一條小原九一郎　木落倉吉　入江・壽平　吉田義章　入江寛六　世羅平　西田世羅幸二　一條小原九一郎　木落倉吉

（石川縣）
（福井縣）
（福岡縣）
（福島縣）
（靜岡縣）
（大阪府）
（東京府）
內藤智厚　加藤智明　前田日敎　笹本春義　野末文太郎　佐野佐平　朝倉一乘　內藤正一郎　長尾徳　長尾繪之助　木村芳之助　加納三郎　日雄　熊井覺之助　林本光　中井政吉　片山與吉　高木作太郎　市川榮吉　郡山庄兵衛　上山徳　山本信次郎　繁　日野源兵衛　古谷養眞　郡山庄吉

鈴木喜之助　水谷要藏　相澤健次郎
山本勘兵衛　寺尾利左衛門　淺尾清藏　近藤キン
長谷川德太郎　青山源藏　堀口三郎　大嶋ヨシ
土田留吉　川瀬鹿郎　竹下龜太郎
山本ツネ　田村三五郎　大島良太郎
板倉幸太郎　田中治三郎　水谷周助　細沼喜玉郎
高名德太郎　井上仙吉　館野亮　金子喜三郎
武藤嘉吉　山本喜兵衛　岡崎乾治　小島善藏
川邊喜丸右門　小池徳三郎　岡部太郎　川鉄五郎
澤田清吉　細井　府川萬太郎　三道　保川チヨ
飯倉增藏　青藤
（以下次號）

日蓮大士百五十年紀念大會寫眞發賣廣告

開宗第六百五十年紀念

今度の開宗第六百五十年紀念大會は誠に前古未曾有の盛儀で千歳忘るべからざる宗史上の大事實であります隨て宗徒たる者は當々此式典を挙げなした時の意氣を以て聖祖大士にお仕へいたし又宗旨の弘通を念とせねばなりませぬ　うこで其時を忘れませぬのは其當時の寫眞に若くものはありません　不肖信一は幸に此大會に際して師子王文庫よりの命に依り左の通り廿餘圖の狀景を謹寫仕りました　洵に不肖の光榮で御座いますから　宗門縁素各々これを備へて一は宗旨的意氣の發揚に資せられて家々の珍追懷し　一は宗門的盛事を扱て同文庫の許可を得て諸君へ發賣仕ります　追懷せられなば此次の開宗七百年紀念大會時分には眞に得がたき寶となるのであります　又一組（廿二枚）で多少にかゝはらず一枚づゝでも御希望に應じますから御注文下さい

（一）師子王文庫臨時出張所の圖
（二）道路布教隊大會事務所出發の圖
（三）道路布教隊宮城の正門へ進行の圖
（四）全宮城遙拜法味奉獻の圖
（五）全土橋詰演說の圖
（六）全其二鎌前田中智學居士演說の圖
（七）全所布教隊如說修行鈔拜讀の圖
（八）全銀座松岡菓子
（九）全水谷町鷲塚第一隊列場前演說
（十）全永代橋詰にて演說の圖
（十一）全深川淨心寺演說會場へ乘込の圖
（十二）佐渡始顯御本尊御唐櫃并に田中智學居士己下御迎人一同整列の圖
（十三）全御本尊并に行列上野の爲事務所出發の圖
（十四）全御本尊御迎式場へ出發の圖
（十五）全上野三橋行列進行の圖
（十六）全公園正式々壇にて演說の圖
（十七）全田中智學居士結願文朗讀の圖
（十八）全式場内の光景
（十九）全田中先生歸途御尚車の圖
（廿）濱大僧正脇田僧正本多僧正田中
（廿一）宗徒大會の圖
（廿二）大會銀座松岡菓子舗前脇田僧正演說の圖

右貳拾二圖一組金參圓三十錢也

各圖一枚金拾七錢也（大きさ●長二寸三分●幅五寸三分寫眞にて）

東京市中は代金引換にて御配達仕候遠方の御向は爲替御振込次第御送り可申候　但し郵券代用にて差支無之候

御育が上件の各圖謹寫を許されたる光榮を欣ぶの餘り此際特別大割引を以て寫眞撮影仕りますれば續々御用不申越

東京市京橋區銀座一丁目二十一番地（東仲通）

申込所　東京帝國大學東京植物學會　寫眞師　小嶋信一　白敬

最輕便にして最完全なる大出版

校正精確　代價至廉

高祖は日本の精神にして世界の光明なり、御遺文は末法の法華經にして最も明確に佛意を人間の言辞に飜譯したる世界最上の名著也、信ずるもの誇ずるもの總て救はるべき人界無上の大福音也、されば教徒は勿論、一般世間の人の必ず讀まざるべからざる寶典也、是を以て今回最大會及を計りて左の輕便的出版を創始す、現行遺文錄の校正漏れば、小林日董、本間海解の兩碩學が多年苦心重訂せられたる稿本に基きて校正し、御眞筆の存する諸篇は、一々拜照較訂し、未刊の逸篇は採擇して『續集』となし更に各教團の碩學一百餘名の校正を請ひたる未曾有の出版なり

高祖遺文錄

洋製袖珍　一册凡三千頁
「並製」　金壹圓以内
「上製」　金壹圓五拾錢以内

（對照目錄、類聚索引、略年譜、聖蹟及闇浮統一地圖、註疏案内等を合編す）

（外に雁皮紙和裝の紀念本も製す○實價未定）

本年十二月中出版「豫約申込」は十月十三日迄申込と同時に金五十錢を添べし　此保證金銀行へ預●價の非常に廉なるは原版製造の施主あるによる●資助限りあれば出版部數豫定あり後れては定價に復します●校正日誌は日宗新報へ掲ぐ宗學上重要の記錄とならん

豫約申込所

東京府荏原郡池上村林昌寺内　祖書普及期成會

御遺文縮刷之要旨

宗學ノ振ハサルハ御遺文ヲ精讀セサルニ依ル、御遺文ノ精讀セラレザルハ卷帙浩瀚携帶ニ便ナラザルモノ其一原因タラスンハアラズ、夙モ行住坐臥御遺文ニ親侍シ夙夜御遺文ヲ拜讀スルヲ得バ任運ニ聖祖感靈ノ感ヲ享ケ自然ニ聖祖ノ大精神ヲ體得センコト必セリ　丈レ斯ノ如クナラバ宗學ノ振起誰カ能タ之ヲ禦カン、今日、率專ラ御遺文ノ大普及ヲ謀リ自他共ニ御遺文ヲ拜シテ聖祖ノ感靈ト人精神トニ感應セシムルノ外アルヲ可ラズ、候チ微力自ラ圖ラズ同人ト共ニ翻刻錄ヲ校訂シ、先德ノ校本ニ考ヘ眞ヲ正シ、且ク類聚ノ索引、附シ、問題以テ一卷ニ編輯印刷シ終ランコトヲ發願ス、嗚呼明治三十五年ハ開宗紀元第六百五十年ナリ、聖ヲ去ル悠遠ニシテ心日ニ微ナラントス、遂ニ本願ヲ成就セバ聖祖聖靈感格嚴ノ一摩指ニ報ゆ奉ルヲ得ン　伏テ百事注意アランヲヒチ請フ

教願主　加藤文雅　敬白

統一團報

第八十八號

明治三十五年八月十五日發行

目次

一即身成佛……本誇院 稿
▲混雜の即成と純粹の即成▲混雜純粹の変
▲混雜と純粹二面不二　▲成佛の相續
一女性に對する聖祖日蓮の溫情……奮迅院 稿
▲出產に對する同情　▲月水に就ての教示
▲男女相思の情想　▲乙御前と千日尼
▲學養の奬勵　▲親子の愚愛
一親鸞說時輪……高田 日暢
▲親鸞の說時は法華已前なる明證▼
▲法華の說時は親鸞の已後なる明證▼

統一彙報

一至師隨行日誌(續)……高木松太郎
一第二回本化門下夏期講習會彙報……奇峰生
一本化宗友會第十回の會合……
一本化中央青年會の成立……
一法雨光治東播明石の浦……
一宗從大會決議實行期成同盟會……
一第二回本化夏期講習會の終了……

廣告數件

廣告

主筆　田中智學居士

妙宗

毎月一回(六日)
毎號大附錄附發行
所相模鎌倉要山師
子王文庫
定價一部金十錢
(附錄共)郵稅金一
錢壹ヶ年前金壹圓
貳拾錢(不要郵稅)

送金は師子王文庫宛鎌倉局振込の事

四月六日「第五編」第七號」既刊

主筆　加藤文雅

日宗新報

毎月三回(八の日)
發行、發行所武藏
池上日宗新報社
定價一部金五錢、
十八冊(半年分
八十五錢、卅六冊
(壹年分)壹圓六十
五錢、一切前金の事、送金は池上郵便受取所
へ振込み「日宗新報主任加藤文雅」と御指定の
事、七月八日『創立第八百十八輯』『革新第二百
三十九輯』既刊

廣告

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊五錢十二冊前金五十七錢廿四冊前
金一圓八錢郵券代用は一割增但五厘切手に限
一講讀申込の節は住所姓名を階書にて認むべし
一爲替は武藏國品川郵便局へ向け御振り込の事
一本誌は別に領收書を發せず但し領收證を要す
る向は返信料を封入するか或は爲替振込の節
拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五號活字廿四字詰毎一行金七錢なり

明治卅五年七月十五日印刷發行

發行人　井村恂也
編輯人　山根顯道
印刷人　鈴木暲學

東京府荏原郡品川町元南品川四百十二番地

發行所　統一團團報部